

食品の色彩嗜好と味覚に関する比較研究

一日本における高齢者の場合一

奥田弘枝* ○小園佳美* 川染節江**

(※ 広島女学院大院 ※※香川県明善短大)

目的 食物の色彩は人間の食欲に影響を与え、色彩嗜好と味覚にも関連があることが、これまで演者らが行った10代、20代、40～50代の調査で明らかになっている。高齢化社会をむかえた現在、高齢者の色彩嗜好と味覚の関連性と男女による比較を実施したいと考え、日本における、高齢者の食品の色彩嗜好と味覚に対する考え方について、男女比較、世代間比較を行った。

方法 60代、70代の男女計194名を対象に、アンケート用紙とPCCSハーモニックカラーを用いた基本的な有彩色として赤、オレンジ、茶、黄、黄緑、緑、青、紫、ピンクと無彩色の10色にそれぞれ明度、彩度の異なる5色ずつ計50色からなるカラーチャートを提示し、回答を求める方法により、2000年4～5月にかけて調査を実施した。

結果 食欲が増す色としては、主に暖色系が選択された。また、緑色の選択率も高く、高齢者の場合、グリーンに対するヘルシーイメージが強いと考えられた。食欲を減退する色としては、黒色や灰色などの無彩色、茶色、青色が多く選択された。五味をイメージする色では、その味を呈する食材の色の刷り込みがなされているためか、ある程度固定されたイメージが見られた。高齢者については、中高年層と同様の傾向が見られた。